

柳川の堀割「再生」について考える ーフィールドワーク実施報告ー

坪原 紳二
居住環境学専攻

0. はじめに

環境共生学部は、1年生対象の「導入科目」の一つとして「フィールドワーク」という科目を設けている。現場を体験させ実証的教育を行うことを目的としており、各教員がテーマを設定し、その中から学生が専攻に縛られることなく、関心のあるテーマを三つ選択することになっている。

筆者は都市計画が専門なので、環境との共生、あるいは住民参加・住民主体といった点で、興味深いまちづくりを進めている自治体を訪ね、調査を行いたいと考えた。しかしこの4月、本学に赴任するまで、熊本はもちろん九州にすら何の縁もゆかりも無かった人間である。場所の選定に窮しているとき、ふと思いついたのが柳川である。

福岡県柳川市。人口4万3千ほどのこの小さなまちが、かつて一つの映画を通して、全国のまちづくりに携わる人々（行政も住民も）から熱い視線を向けられたのである。その映画とは、『柳川堀割物語』である。『風の谷のナウシカ』『となりのトトロ』などを手がけた宮崎駿・高畑勲コンビによる長編ドキュメンタリー映画で、そこには柳川における人々の、堀割とのわずらわしいが豊かなつきあい、そしてそのつきあいが一度壊れ、荒廃してしまった堀割を住民総参加で再生していく様が、美しく生き生きと描かれている。筆者は学生時代、東京でこの映画を見、感動して柳川を訪ねた経験があった。バス会社に問い合わせると、大学から1時間半ほどで行けるといふ。そこでフィールドワークでは、柳川の堀割再生の取組みを学ぶことを通じ、自然との共生やまちづくりにおける住民参加の大切さについて、考えてもらうことにした。

本稿ではこのフィールドワークの内容を報告しつつ、柳川の堀割再生の経緯、現状について紹介し、その上で『柳川堀割物語』を試論的に再考してみたいと思う。なお参加者は計14名、内訳は、生態・環境資源学専攻が1名、居住環境学専攻が6名、食・健康環境学専攻が7名で、1999年8月26・27日の2日間にわたって実施した。

1. 『柳川堀割物語』の鑑賞

フィールドワーク 1日目は、学内で映画『柳川堀割物語』の鑑賞会を行った。翌日の現地調査の、事前学習という位置付けである。

本映画はプロローグ・エピローグを含め全13章から構成されており、前半では、堀割が果してきた役割やその仕組み、また人々が堀割を維持するために行ってきた工夫が、水面からの美しい映像を交えながら紹介される。

柳川市には今日なお、約470kmに上る堀割網が家々の裏にまではりめぐらされている。この堀割は、かつて柳川の人々の生活・生産活動にとって、なくてはならないものだった。炊事・洗濯はもちろん飲用水にも利用され、また魚など食糧の供給源でもあった。一方、陸上交通が未だ発達していない中、堀割は物資の主たる輸送路であり、農業用水として、また底の泥は肥料としても使われ、農業にも不可欠の存在であった。さらには護岸の豊かな緑とあいまって、市街地環境のアメニティを高め、また子供たちにとっては格好の遊び場でもあった。そして、こうした堀割の多様な役割を維持するために、人々は汚水を直接堀割に流さず土に浸透させるなど、細心の注意を払ってきたのである。

ところが第5章は、高度成長期、この堀割が消滅の危機に瀕したことを告げる。上水道が整備され、水上輸送は陸上輸送にとって代われ、農業は化学肥料を使うようになり、堀割はもはや必要不可欠のものではなくなった。それとともに人々は堀割にゴミを捨て、直接汚水を流すようになり、豊かな生活を育んできた堀割は、蚊の発生源と化してしまった。映画は当時のすさまじいばかりの荒廃ぶりを映し出す。そして市は1977年、ドンコ舟による川下りコースなど一部幹線水路を残し、他はすべて埋め立てるか都市下水路とする計画を決定したのである。

映画後半は、この一度は死を宣告された堀割が、一市職員の提言をきっかけに再生され、再び人々が堀割とのつきあいを始めていく過程を感動的に描き出す。

水道課職員だった広松伝氏は、77年4月、堀割担当の環境課に配属される。すでに堀割の埋め立て方針は固まっており、国の補助金申請の段階まで進んでいたが、彼はこの計画に正面から異議を唱える。すなわち堀割には、水害を防ぐ遊水機能、地盤沈下を防ぐ地下水涵養機能など、柳川の存立に係わる重大な機能があることを訴えたのである。幸い市長の理解を得るところとなり埋め立ては中止。代わって77年11月、堀割を存続させる方向での『河川浄化計画』が策定される。浚渫、流水の確保などの「河川整備」、「汚水の流入抑止」、及び「維持管理」の3本柱からなっており、78年3月には市議会で5ヵ年の事業継続費が議決される。

ただ広松氏は、これで安心したわけではなかった。なぜなら市はすでに68年から3ヵ年計画で、多額の予算を組み浚渫事業を行っており、それが74年には再び、川下りができないほど荒廃してしまっていたからである。彼はこの原因を、「住民の参加がなかった」¹⁾ことに求める。そこで今回は、「市民の理解と認識を得ること、そして、その上でこれに参加してもらうことが浄化を成し遂げる鍵である」という基本的な考えに立脚して、徹底的な啓蒙を行うことから始めた²⁾。具体的に行ったことは、以下

の通りである。

最初は、行政区長（町内会長）及び環境衛生組合役員を校区単位で招集して懇談会を開き、堀割や川の機能と役割の理解と認識を得ることに努めるとともに、計画の説明を行って協力をとりつけ次の段階の日程等を取り決めた。次に区長や役員の協力を得て、同じく町内会単位に全住民（各戸1名）を招集して懇談会を開き、住民の理解と参加を得ることに努め、同時に具体的な実務（浚渫）の日程を取り決めて、これに基づいて住民参加で直営で浚渫を行った…³⁾

「2年間で100回以上に及んだ心血を注いだ住民懇談会を中心とした啓発活動は、住民に潜在していた清流への希求を呼び起こした⁴⁾」という。こうして多くの住民の参加により、当初計画を上回る距離の浚渫を、当初計画より短期間に、かつ少ない費用で成し遂げてしまうのである。80年には各地区（行政区）ごとに「用排水路管理実施委員会」が設置され、住民参加による維持管理の体制が整うことになる。

映画では広松氏他市職員が、首まで水につかりながら藻の除去に努めている姿や、地域住民ぐるみで堀割の清掃に当たっている様子が映し出される。人々は再び堀割とのつきあいを始め、堀割は美しさを取り戻し、同時に衰退しつつあった地域の祭も、にぎわいを取り戻すのであった。

以上が『柳川堀割物語』のあらすじであり、またまちづくりに携わる人々が注目するところの柳川でもある。2時間45分というたいへん長い映画だが、学生は、堀割の精巧な仕組み、堀割と人々の共生の姿、また、堀割再生に住民が総参加で取り組んだことに、感銘を受けたようであった。

2. 現地調査

2日目はいよいよ、フィールドワークの眼目、現地調査である。映画を見て学生達は、堀割の維持に熱心に取り組む行政・市民、そしてその結果、美しく保たれた堀割に接することができるものと、期待していた。

午前10時少し過ぎに現地に到着。まずは市役所に行き、現在堀割担当の水路課の職員3名から話を伺った。最初に30分ほどのビデオを見せてくれたが、内容は『堀割物語』と重なる部分が多く、前日長い映画につきあわされた学生達はいささか辟易していた。ただ、一つ大きな違いがあった。それは『堀割物語』が堀割再生の立役者として描いていた広松氏のことが、全く触れられていない点である。これは現在の市の刊行物全般に当てはまることで、堀割が一度荒廃し、それを全市民で再生したとどれも説明しつつ、広松氏にはなぜか言及していない。

これら刊行物を見ると、依然市は、堀割を美しく保つことに力を注いでいるようである。何といっても現在の市の総合計画⁵⁾は、「快適なくらしと水郷情緒が楽しめるまち」を、将来の都市像として掲げているのである。しかし現場の職員からは、残念ながらあまり歯切れの良い話を聞くことはできなかった。ビデオの後、まず5分ほ

ど堀割について市が行っている事業の説明を受けたが、どうも水路課として何をしているのか判然としない。確認すると、「護岸改修とか、浚渫とか…。さらにこちらが、「合併浄化槽の普及にも取り組んでいるのでは」と問うと、「やっています」との答え。何人か学生も質問したが、あまり会話は盛り上がりせず30分足らずで終わりとなった。

その後、市役所を出て各手に分かれ地元住民からのヒアリングを行い(後述)、午後1時、市の図書館と“水の資料館”の複合施設、“あめんぼセンター”で再集合した。ここでは広松伝氏から話を伺うことになっていた。広松氏は今は市の職員を退職され、一民間人として水の問題に取り組み続けている。水の仕事でしばしば熊本にも行くそうで、忙しいにも係わらず私達一行をたいへん歓迎してくれた。

まず1時間ほど、人々が定住化する前の時代までさかのぼり、堀割がなぜ作られ、なぜ荒廃し、そしてそれをどう再生したのか、スライドも交えながら説明された。その後質疑に入ったが、話は今の堀割をめぐる状況に集中した。広松氏は現在の市当局に対し、相当批判的であった。前述の護岸改修についても、一見石垣風だがコンクリートで固めてしまっており、自然の浄化能力を失わせるものと断じていた。また堀割への導水を行っていないため水量が減少し、ヘドロ化が進行していると憂いていた。一方市民に対しては、総じて肯定的であった。すなわち依然、多くの市民が堀割の清掃活動に参加しており、水質維持への意識も高まっているとのことであった。

3時ごろ氏と別れ、再び地元住民からのヒアリングに散ってもらった。ヒアリングは、現在の堀割との係わりを中心に最低5人の人から話を聞くこととし、1班3~4人で四つの班に分かれ行った。4時半に再度、あめんぼセンターに集合し帰路に着いたが、一同疲れ切った表情であった。炎天下、長時間歩き回ったこともある。しかし期待を裏切られたことから来る疲労感も大きかったのではないだろうか。以下、学生のレポートからヒアリングの感想を紹介する。

映画で見る堀割とはまた違った印象を受けた。川の流れが緩やかなせいでろう、堀割の水は緑色をして濁っていて、きれいと言えるものでもなかった。堀割の近くに寄ってみると、ドブ臭い匂いがする所もあった。……映画の中のあの熱心な堀割を思う気持ちを見つけることができなかった。というのは、実際、現地の人に話を聞いてみても、期待したほどの答えが戻ってこなかったからだ。……(居住：中元俊博)

街の人々が、どのように堀割のことを考え、維持管理しているのかという答えを期待して街の人々に質問してみたが、返ってきた答えは「廃水を流している」とか「川の近くでない人は汚れに気を使っていない」というもので、少しがっかりさせられた。また、ビデオでは洗濯石鹸を配布している映像があったが、実際は一部の団体が石鹸作りや配布を行っている程度だということだった。「堀割をきれいに」という意識が住民の隅々にまで行き届いていないように感じた。……(食：山元愛)

実際に堀割と係わっている人の少なさに驚いた。また、小学生から高校生まで地元の子供たちと、堀割との接点は少なく、全体的にあまり興味を持っていないよ

うだったので残念だった。「今柳川で生活している人々のほとんどは、堀割についてあまり多くを知らないのではないか」。これが、柳川市内で現地調査をした後の私の率直な意見である。……（食：養父郷美）

筆者も何人か、地元の方から話を伺ったが、やはり「市役所や観光協会が掃除している」といった答えばかりで、自ら水につかって堀割の維持に努めているという人には出会うことができなかった。また、堀割近くの喫茶店の女性は、柳川生まれの柳川育ちだが『柳川堀割物語』のことは知らず、かつて住民総参加で堀割をよみがえらせた事実も知らなかった。

一方堀割の状態については、確かに川下りコースはゴミもなく、護岸には木々がうっそうと茂り遊歩道も整備され美しい景観を呈していた。しかしその他の水路は総じて汚れており、市街地環境のアメニティを高めているとは言い難い状況であった。それでも広松氏によれば、当日は朝方大雨が降り水量が増えているので、普段よりはましだという。

広松氏は変わらず、堀割を含む水の問題に精力的に取り組んでいる。しかし市の担当者はどうも熱意に欠け、また一般市民もあまり堀割に関心を持っていない。このままでは再び堀割は荒廃するのではないか。すでにその兆候は現れている。そして埋め立て問題が再燃するのではないか。現地調査の結果、我々はこんな危惧を抱いたのであった。

3. 『柳川堀割物語』再考

もちろんただか1日の現地調査で、断定的な判断を下すことはできない。しかし70年代後半から始まった再生の過程、『柳川堀割物語』が感動的に描き出したプロセスをもう一度振り返って検討するならば、私達が見た柳川の現実、あながち根柢の無いことでもないと思われる。

当時の市の文書にしばしば登場する言葉の中に、「啓発」「啓蒙」という言葉がある。市民に堀割の大切さを理解してもらい、そのことで彼らの参加を得ようとしたのである。しかし少なくとも都市計画の分野では、この言葉はしばしば、役所が考えた計画を住民に無理に押し付けようとする際使われる。

例えば、土地区画整理事業という都市計画の手法がある。わが国で最も広く行われている市街地整備の手法で、道路を整備し宅地の形状を整えることを目的としている。行政は全国一律のマニュアルに従って幾何学的な道路網を計画し、細部まで詰めたうえで住民に区画整理案を提示する。そして住民が、“減歩”という負担⁶⁾、あるいは生活環境の悪化、コミュニティの崩壊などを理由に反発すると、住民は何も分かっていないと考え、啓発・啓蒙に乗り出すわけである。

もちろん行政職員は、市民が持っていない専門知識を有している。しかしまちの将来の姿を最終的に決めるのは、住民のはずである。行政の役割は、今のまちにどん

な問題があるのか、それを解決するにはどんな方法があり、また各々の方法にはどんな長所・短所があるのか、住民に分かりやすく提示することまでであろう。その結果、住民が、確かに今のまちは道が狭くて車には不便だが、歩行者には安全なのでこのままで良いと判断したのなら、それに行政は黙って従うべきなのである。このことを理解せず、住民の価値判断まで代行して“勝手に”決めた計画をあくまで押し付けようとするから、各地で強い反対運動が起きることになる⁷⁾。

環境を改善する柳川の取り組みと、こうした都市開発事業とは、一見何ら接点が無いように見える。しかしそのプロセスに着目するなら、意外な類似性があることに気づくだろう。堀割を残すという基本方針を決める際にも、その具体的方策を示す『河川浄化計画』を策定する際にも、住民は一切参加していない。すべてを行政が決め、その後で住民に計画を説明する。その姿勢は、住民の声を聞いて計画を修正するといったものではなく、とにかく啓発し、啓蒙するというものである。つまり住民は、啓発され、啓蒙される存在としてしか位置付けられていないわけである。確かに住民は、堀割の清掃活動には参加した(全住民ではないようだが)。しかしこれは、本当の意味での住民参加、すなわち計画立案段階からの住民参加ではなく、むしろ行政が決めた計画への住民動員と言うべきものであろう。

堀割再生は、個人の財産を侵害したり、環境を損なうものではないから反対運動は起きない。しかし住民の内発的要求に基づくものでない以上、継続性には自ずと限界がある。また、行政の姿勢が変わったとしても、住民はあえて異議を唱えようとはしない。こうして堀割の環境は、再び悪化の道をたどっているのではないだろうか。当初の予定とは逆の形ではあるが、本当の意味での住民参加の必要性を鮮明に示してくれたように思う。⁸⁾

注

- 1) 広松伝：ミミズと河童のよみがえり，河合ブックレット13，p.29，河合文化教育研究所(1987)
- 2) 広松伝：水路再生と住民参加
- 3) 2)と同じ
- 4) 2)と同じ
- 5) 第3次柳川市総合計画
- 6) 区画整理事業では、道路用地等を生み出すために住民が土地を無償で提供することになっている。この仕組みを減歩という。
- 7) 熊本県内でも熊本駅西口、植木中央などで反対運動が起きており、後者の場合住民訴訟にまで発展している。
- 8) 柳川の堀割の現状については、高群佳代・古川美知子：水郷におけるまちづくりの歴史的考察—福岡県柳川市・熊本市川尻地区の比較研究—、熊本県立大学生活科学部卒業論文(2000)に詳しい。